

(巻頭言)

新日本建設の先駆

電気通信協会会長 中山龍次

建国以来未だ曾て見ざる敗戦の結果として、我国は世界の四等国に墜落した。数年前迄世界五大強国の一つとして或は三大海軍国の一つとして世界に雄飛した我國民は、今や困苦欠乏のどん底に喘ぎつゝも、あらゆる苦難を克服して、新日本を建設すべく雄々しくも立ち上らんとしつつある。

新日本建設の要諦は言ふ迄もなく先づ敗戦の現実を自覚し、其の原因を正常に認識することである。敗戦の原因は素より一、二に止まらない。政治、経済、産業、教育等あらゆる方面に於て幾多の原因が指摘される。併し各方面に共通する根本的原因は、我国に於ける科学技術の劣つてゐたこと、国際知識の極めて貧弱であつたことは疑ひを感しない。

要するに我国の指導者は、誤れる独善的思想の下に國民を盲者とし聾者たらしめ其の耳目を掩ふた。其の顯著の一例はラジオ利用に在る。即ち日本と独逸とは其の國民に対し短波放送の聴取を厳禁し、國民の耳を掩ふた結果、國民は世界の情勢から締め出され、国際知識の吸収は不可能となつた。

敗戦後最も速かに顕はれた民主主義の実現は、実に短波放送聴取の解禁であつた。これに依つて我國民は始めて世界の放送を自由に随意に選択聴取することが出来た。斯くして國民は思想的孤立より脱却し、広く世界の列強と相伍して新日本建設の軌道に乗ることが出来たと云ひ得る。

世界の電波工業は戦争中に於て偉大なる進歩を遂げ、重要な役割りを果たした。電波探知機、標定機、レーダー等は其の最も顯著なるものであつた、試に戦争勃発当時と僅か3年後に於けるレーダーを比較するとき、其の驚くべき進歩が認められる。而して我国は何時の間にか此の方面に於ても列強に比して多大の遅れを取つたのである。

併し終戦後新日本の建設に立ち向ふや、我が電波工業は科学的に亦生産的に早くも著しき進歩を示すに至つたことは、全波受信機展覧会に於てこれを認めることが出来る。即ち本年三月我が電気通信協会は我国主要のラジオ製造家22社の協力に依り、東都に於て全波受信機展覧会を開催した。而して此の会が数十万の觀衆、特に青年学徒の熱心なる関心を集めたことは周知の所である。觀覽者の多くは敗戦日本が僅かに半歳にして斯くも優秀なる短波・全波受信機の製作に成功したことに對し敬意と希望の念を以て見守つた。

東都の全波受信機展覧会には特にマッカーサー司令部の工業部門並びに通信部門より十数名の事務家及び技術家の視察があつた。余は是等諸氏を案内し且つ懇談するの機会を得たのであるが、諸氏は孰れも終戦後僅かの時日に於て我がラジオ製造家が平和産業に早くも立ち直つたこと、其の技術の進歩に對し賞賛の辞を述べられた。而して其の結果とも見るべきは、我がラジオ製品の輸出が逸早く許可されたことである。

去る2月24日マッカーサー司令部より発表せられた本年度日本の輸出計画の中には、ラジオ真空管(100万箇)、ラジオ受信機(3万箇)の輸出が許可された。此の他国内用として1ヶ年300万乃至400万台のラジオ受信機の製作は司令部より特に指定された。

マッカーサー司令部は夙に我が放送事業に甚大の関心を有し、放送内容の充実を企図せられ、又ラジオ用品の生産工業に優先順位を与へられたのである。斯くの如きは新日本建設の基礎工作として如何にラジオが先驅の役割りを担ひ、又ラジオ工業の前途が如何に洋々たるものであるかを如実に証明するものである。

今やラジオ用品は世界的に極度の不足を告げ、特に太平洋及びアジア地区に於ける需要の激増が認められる。此の時に當つて全波受信機特輯号の発刊は斯界の技術的進歩に貢献すること甚大なるを思ひ、読者と共に其の成功を期待するものである。